

第11回 小さな展覧会

京都発掘'93



1993.8.14~8.29

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

ごあいさつ

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、1992年度に43件の発掘調査を行いました。今回の展覧会では、そのうち注目された発掘調査を17件とりあげ、京都府内の各機関の発掘成果23件とあわせて展示しております。

この展覧会の目的は、冒頭で述べましたように、前年度に京都府内で行われた発掘調査の成果や出土遺物を広く一般の方々に紹介し、合わせて埋蔵文化財への理解を深めていただくことにありますが、そのためにも、皆様によりわかりやすく親しみやすい展示をこころがけていくつもりであります。

今回の展示にご協力いただいた各関係機関をはじめ、後援をいただいた京都府教育委員会ならびに協賛をいただいた向日市文化資料館に感謝いたします。

1993年 8月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山 敏男

凡 例

1. 本図録は、1993年 8月14日～ 8月29日の第11回小さな展覧会「京都発掘'93」の展示図録である。
2. 展示品は、京都府埋蔵文化財調査研究センター及び各機関が主として1992年度に発掘調査を行った遺跡・遺物を対象とした。
3. 収録した写真は、京都府埋蔵文化財調査研究センター・京都府立山城郷土資料館が撮影したもののほか、次の機関から提供を受けた(順不同、敬称略)。
大宮町教育委員会 舞鶴市教育委員会 福知山市教育委員会 綾部市教育委員会
勸京都市埋蔵文化財研究所 勸向日市埋蔵文化財センター 長岡京市教育委員会
勸長岡京市埋蔵文化財センター 平等院 宇治市教育委員会 山城町教育委員会
関西文化財調査会 京都府教育委員会
4. 資料調査、図録作成、展示品借用に当たっては、上記の写真提供者のほか、各関係機関・個人の方々からご指導、ご協力を受けた。
5. 本図録は、高橋美久二(山城郷土資料館)、平良泰久・田中 彰(写真)・村田照久・辻本和美(京都府埋蔵文化財調査研究センター)が分担して作成し、辻本がまとめた。



目次

里ヶ谷横穴群	1
奈具岡・奈具谷遺跡	2
左坂墳墓群	4
定山遺跡	5
田辺城跡	6
カヤガ谷古墳群	7
上ヶ市遺跡	8
細谷古墳群	10
八木城跡	11
鹿谷遺跡	12
栗栖野窯跡	13
長岡京跡	14
下植野南遺跡	16
内里八丁遺跡	17
大切遺跡	18
荒坂遺跡	19
平等院庭園	20
光明山寺跡	21
燈籠寺遺跡	22
西山遺跡	23
西山塚古墳	24
瓦谷古墳群	26
恭仁宮跡	28
描かれた古代	29
その他注目の遺跡	30
展示品リスト	32



さと が たに
里ヶ谷横穴群 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

6～7世紀
すき
 大宮町周枳

丹後に多い横穴群

山腹にぽっかり穴を開ける横穴は、古墳時代後期の6世紀を中心に各地で盛んに造られた。府内では、南山城と丹後半島に多くみられ、とくに里ヶ谷横穴群のある大宮町の竹野川沿いには、おおたがはな・ありあけ・さきさかの大田鼻・有明・左坂などの横穴群が密集して築かれている。里ヶ谷では、5基の横穴が調査された。崩れやすい山の斜面に、長さ5m、幅2mほどのかまぼこ形の天井をもつ長方形の墓室を掘り込む。入口は木の板でふさいだらしい。2号横穴では、子供の骨が次の家族の埋葬のため墓室の隅にいていねいに片づけられていた。左坂横穴からは、あわびの殻がみつきり、被葬者と海との結びつきがうかがえる。

- ▶ 死者にそえられた容器
- ▼ うす暗い横穴内の埋葬





弥生時代の玉作りの村跡

先年、遠所遺跡で大規模な製鉄跡が発見された弥栄町から、今度は、弥生時代の玉作りの村跡が見つかった。丹後の代表的な弥生遺跡である奈具遺跡から少し奥まった丘陵にあり、山の斜面にはりつくような格好で円や方形、テラス状の竪穴式住居跡が22基見つかった。住居内からは、緑色凝灰岩を原料とする管玉の未完成品や石屑と一しょに、石ノコ・玉砥石・石針等の玉を作る工具類もそろってみつき、玉生産の工程を知ることができた。ここでは、わが国で最も古い例となる、水晶製の玉生産も同時に行っていた。玉生産に必要な辛抱強さは、丹後の冬のきびしさが生みだしたものかもしれない。

◀ 玉作りにつかわれた道具と原石 手前は水晶

▼ 斜面に営まれた玉作り工房跡

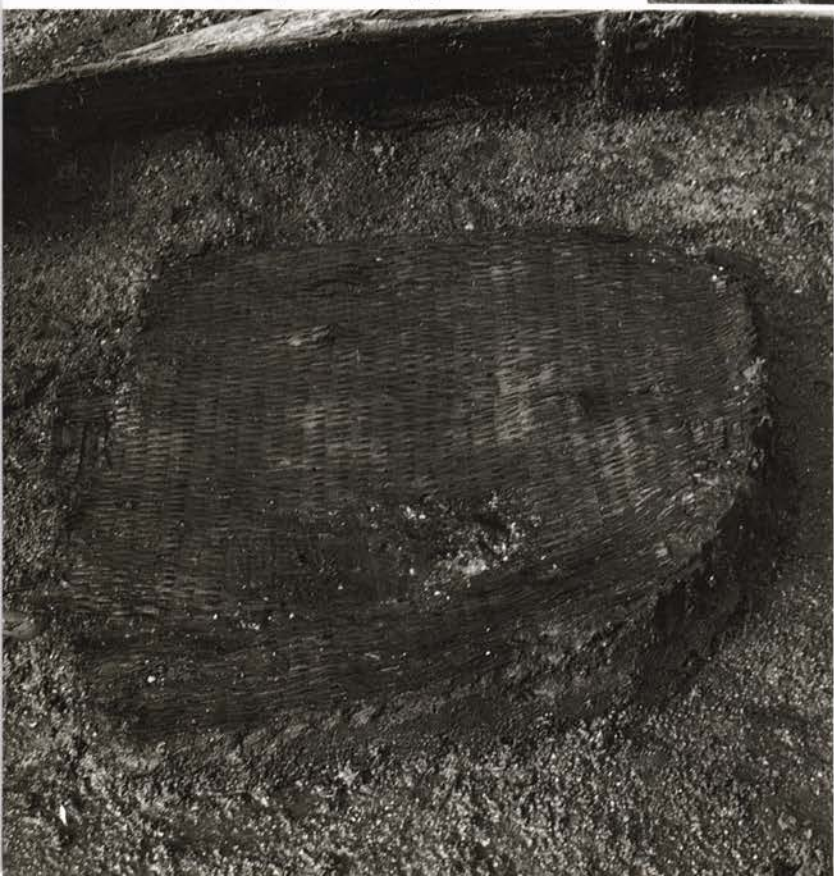


▶ 奈具谷遺跡の調査風景

奈具岡遺跡の丘陵の下からみつかった、ほぼ同じ時期の遺跡。谷部にあるため水はけが悪く、普通はくさって残らない木製品やトチの実などの植物の種が多数みつかった。

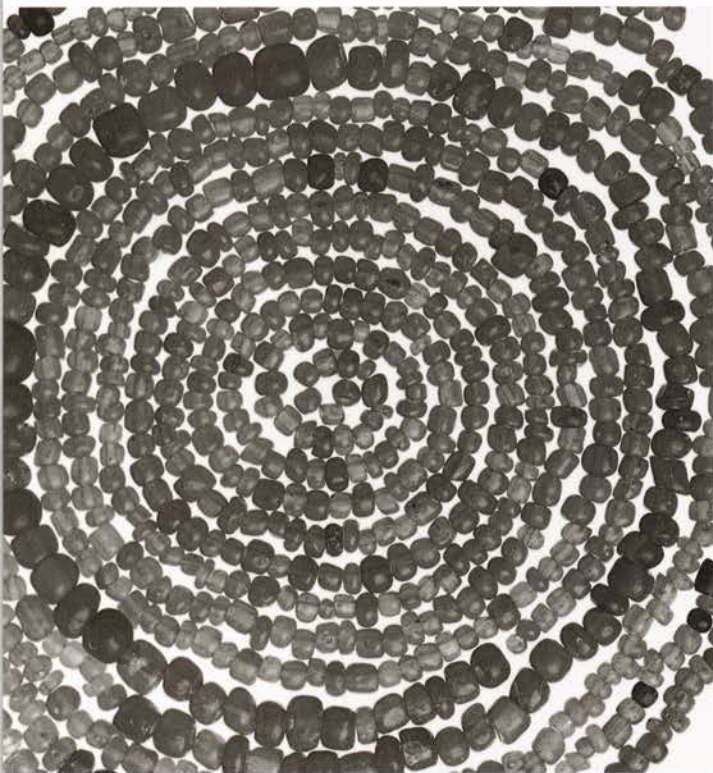


▼ つくられたままの形でみつかった箕み



さ さが
左坂墳墓群 (京都府教育委員会)

2世紀
大宮町周枳



弥生の墓から2千個のガラス小玉

丹後半島のまん中を流れる竹野川^{たけの}右岸の丘陵にある、今から約1,900年前の弥生時代の墳墓群から、死者の首に巻かれた約2千個の青色のガラス小玉が見つかった。6基の台状墓^{だいじょうぼ}に、木棺墓や土壙墓などの墓穴41基が密集して営まれ、ガラス小玉は、その中の16基から百数個ずつ見つかった。墓には土器がそえられ、鉄のヤジリや工具が副葬されていた。ガラス小玉は、弥生時代に朝鮮半島からわが国に伝わったもので、九州北部以外では多量にみつかることは少ない。丹後はなぜか例外で、昨年は近くの三坂神社墳墓群^{みさか}でも約3千個みつき、丹後の古代史に、ガラス玉という新たな謎が加わった。

- ◀ 死者の首にかけられたブルーのガラス小玉
- ▼ 密集する墓穴



天の橋立を望む集落跡

定山遺跡は、日本三景のひとつ天の橋立を望む山腹にある村跡で、縄文時代からすでに人々が住んでいたことが知られている。

昨年の調査では、丘陵の斜面から3基の古墳時代後期の方形竪穴式住居跡が見つかった。住居跡のまわりからは、あまり使用せず^{かっせき}にすてられた多量の土器類と一しょに、滑石製や土製の勾玉・有孔円板・ミニチュア土器などの、祭りの道具が見つかった。どのような祭りであったのだろうか。ここからは奈良時代の布目瓦もみ^{あそかい}つかった。小さな破片であるが、この遺跡と同様に阿蘇海に面する丹後国分寺と何らかの関係があったものと思われる。

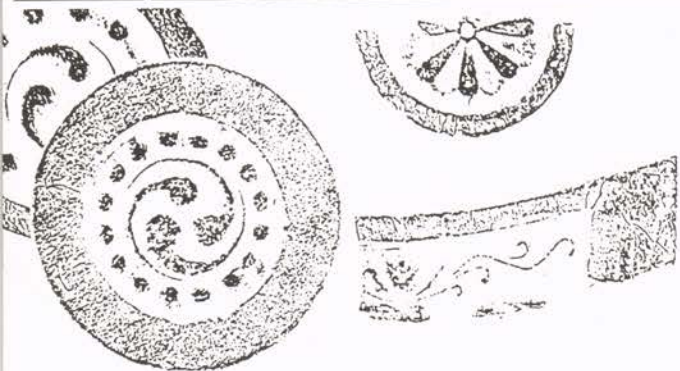
▶ 須恵器と土師器 ▲ 祭りでつかわれた土製の勾玉

▼ 斜面につくられた住居跡



たなべじょう 田辺城跡 (舞鶴市教育委員会)

17世紀
舞鶴市南田辺



城絵図と一致する石垣

田辺城(別名舞鶴城)は、戦国末期、丹後の国主となった細川氏が築城。その後、京極・牧野氏の入城による拡張や改修を経て、最終的には南北約800m、東西約400m、面積約3.3haの広大な敷地をもつ輪郭式の平城となった。しかし、明治の廃城で地上の石垣は取り除かれ、往時の姿は絵図等でのふのみである。昨年、本丸跡南方の調査で石垣や堀がみつき、京極期の絵図に描かれた二ノ丸・三ノ丸の石垣の格好とピッタリ一致することがわかった。石垣は穴太積みの技法で積み、基礎に胴木とよぶ角材を敷く部分もある。石垣の上には瓦葺きの土塀が築かれ、松が植えられていたこともわかった。

- ▼最近できた城門資料館 二階は展示室
- ▼城の堀につかわれた軒瓦 ▼二ノ丸櫓形部の石垣



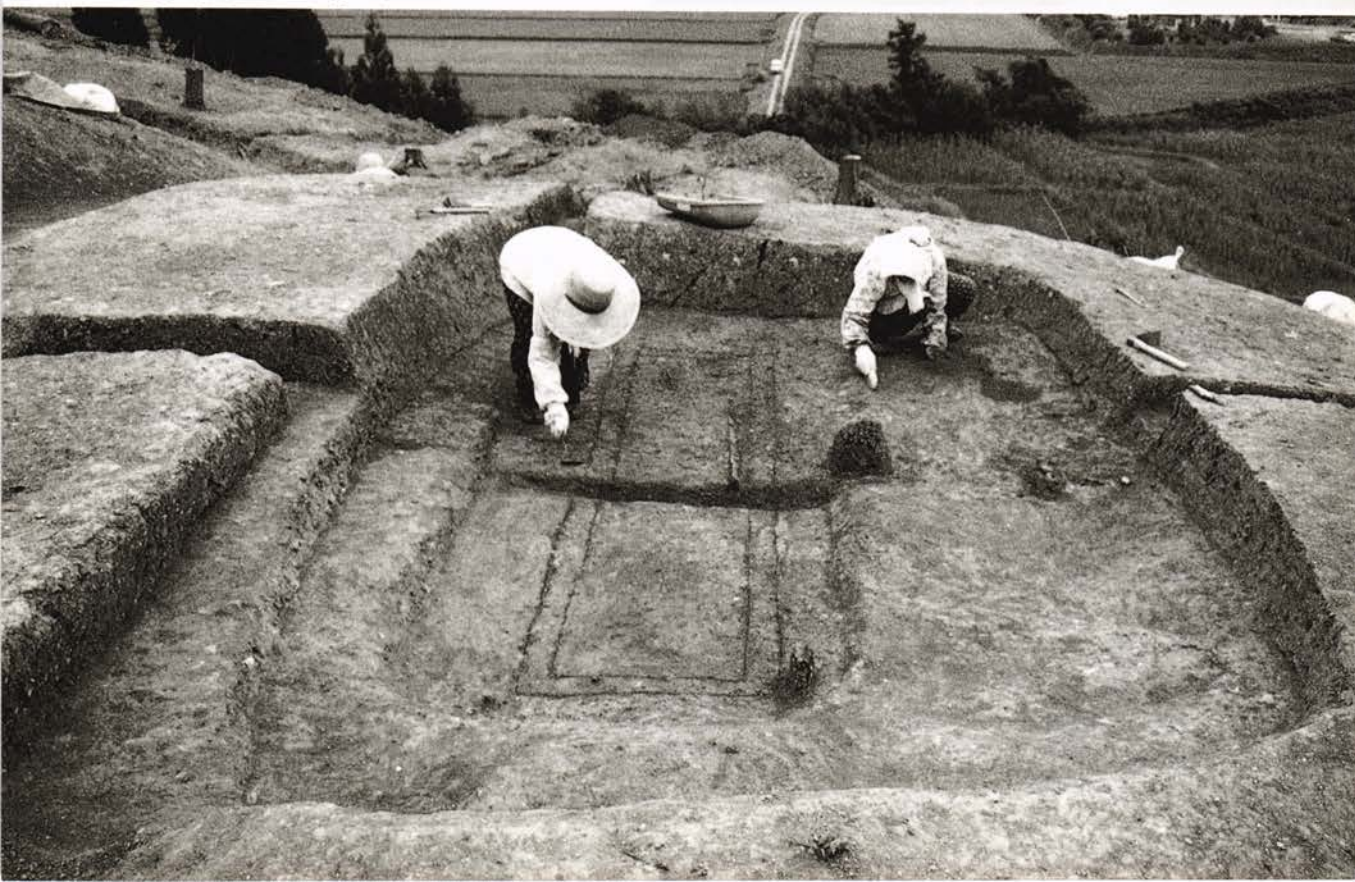
カヤガ谷古墳群 だに (福知山市教育委員会)

5世紀 えぼら
福知山市榎原

鉄製の武器をおさめた木棺墓

福知山盆地の西端にあたる谷奥部に営まれた古墳時代中期の古墳群で、斜面の段を利用した盛り土のない古墳と尾根上に並ぶ7基の円墳からなる。埋葬には、割竹形や組合式わりだけがた くみあわせきの木棺を用い、直接墓穴に埋める。副葬品は、鉄製のヤジリ・剣・刀・斧・ヤリガンナ等の武器や工具類で、葬られた人々の性格を表している。墳丘上からは、埋葬時の祭りにつかわれた、当時としては貴重品で珍しかった須恵器がみついている。周辺地域に先がけて円墳のスタイルを採用することや新式の副葬品は、時代の流行をいち早く取り入れた、当古墳群の築造者達の先進性を物語るものであろう。

- ▼ 長身の鉄製のヤジリ
- ▶ 墓そなに供えられた須恵器
- ▼ 板材を箱形に組んだ棺の跡



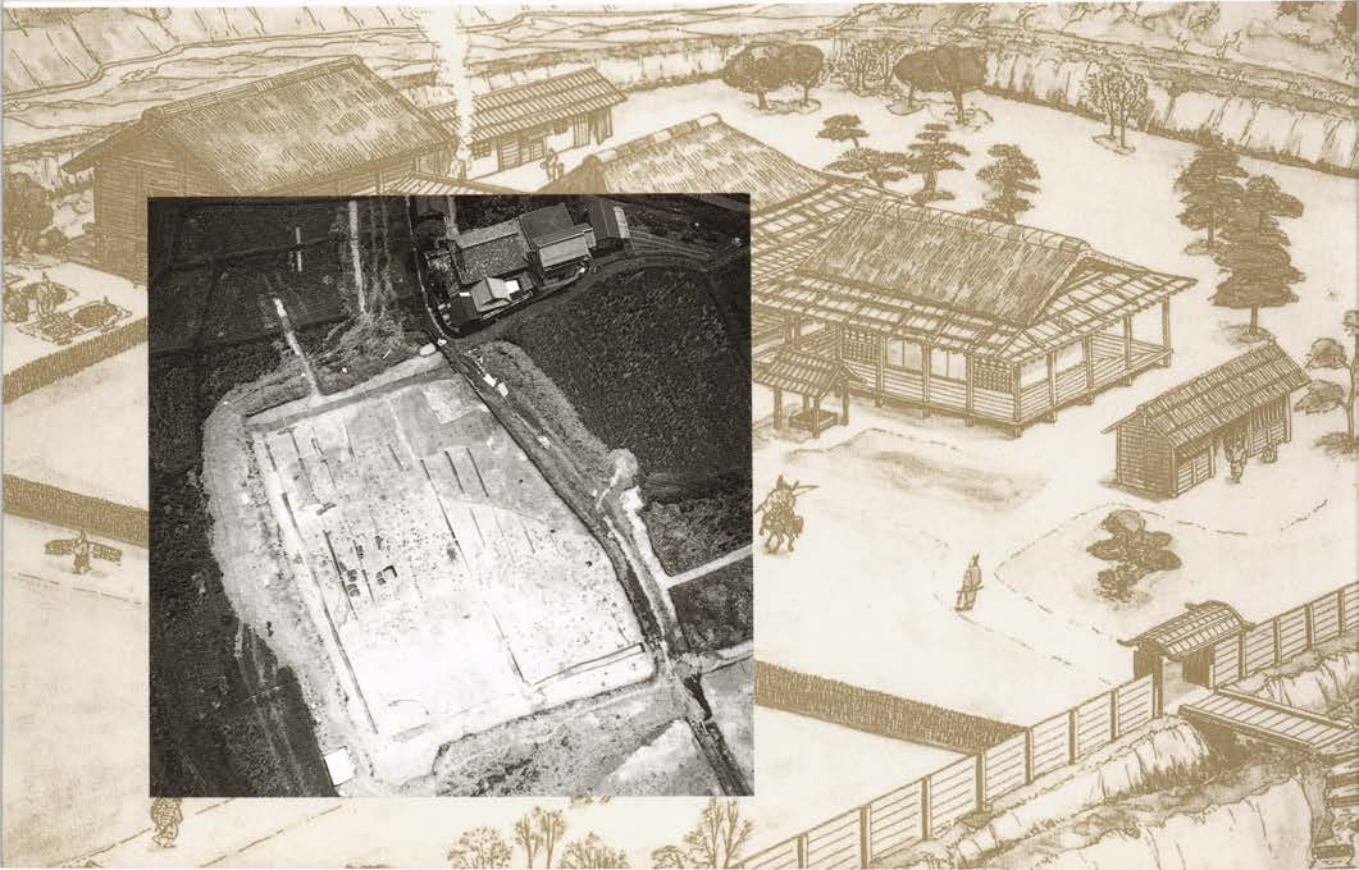


源平争乱期の武士の城館跡

丹波の国は都に近い^{たんぱ}ため、中央の争乱にしばしば巻き込まれた。このため、在地の有力者達は自衛のため砦^{とりや}のような居館を築いたが、そのありさまがわかる大規模な遺跡が見つかった。

由良川沿いの台地上にあり、規模は、南北180m×東西130mにおよぶ。南と東は、川や谷など自然の要害を巧みに利用し、西と北は幅約4mの堀を掘りこみ外側を囲っていた。内部は、約50m四方の区画に溝で3~4分割され、その中に母屋^{もや}や馬屋など大小10数棟の掘立柱建物を配置する。平安時代の末期、この地には松尾神社領の雀部庄^{さずいべのしやう}があり、その荘園経営に当たった在地領主丹波氏にかかわる城館跡であろう。

- ▼ 日本製の日常用の焼き物
- ▼ 中国製の高級品
- ▼ 屋敷跡の中心部と城館のイメージイラスト





▲ 上空から見た城館跡・屋敷内の建物跡と堀
まわりを堀で囲み敵を防ぐ

▶ 外堀跡の調査のようす
土が削られて浅くなっているが、
もとは人の背よりも深く、内側には
土塁が築かれていた





墳丘に石列をめぐる古墳

細谷古墳群は、中丹地域最大級の古墳密集地として有名な^{いくたの}久田野丘陵の東約1kmにある古墳時代後期の小群集墳である。一昨年から京都府教育委員会と当センターが共同して調査を行い、横穴式石室をもつ円墳6基を発掘した。

古墳のほとんどは開墾でつぶされ、石室の残りは悪いが、須恵器や鉄製の武器・馬具、金環、玉類等の副葬品が見つかった。4号墳からは^{ぎんぞうがん}銀象嵌のある^{つば}刀の鐔が見つかり、グループ内の有力者の墓とされる。また、2号墳と9号墳の墳丘上には、石室の前面を飾るように石垣状の列石が二重三重にめぐらされており、類似例の多い兵庫県北部の^{たじま}但馬との関連が注目される。

- ◀ 石室内の調査 ▲ 破片のくっついた須恵器のカメ
- ▼ 墳丘の回りを二重にめぐらす石列



やぎじょう 八木城跡 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

16世紀
八木町本郷

石垣を積んだ武家屋敷跡

八木城は、室町時代に丹波を治めた内藤氏の居城として、また、キリシタン武将内藤ジョアンゆかりの中世山城として知られる。バイパス工事に伴う調査で、城を取り囲む山裾の曲輪跡から隅櫓と武家屋敷の一角がみつかった。石垣で囲まれた屋敷跡には、礎石建物跡や円形石組井戸、池と思われる方形石組が残り、そこから素焼きの皿や丹波・瀬戸の陶器、中国製陶磁器のほか、城下の生活を物語る様々な遺物が出土した。この付近は天神口と呼ばれており、城の本丸への重要な登り口であったらしい。そうすると屋敷の主もかなりの有力者と考えられる。

- ▶ 城でつかわれた容器 上 高級品 下 日用品
- ▲ 「梅田社」銘の入った鱧口 お堂につるす鳴り物
- ▼ 屋敷跡の石垣と石組の井戸跡



亀岡盆地最大の古墳時代の村跡

明治時代、イギリス人ウィリアム＝ゴーランドは、鹿谷の裏山にある古墳群の調査を行い、そこから馬に付ける豪華な飾り金具をみつけている。鹿谷遺跡は、この古墳に葬られた人々が生活した村跡である。篠山盆地にぬける道路に沿った台地の各所から、これまでに古墳時代の方形竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が100軒近くもみつかり、大規模な集落跡であることがわかってきた。竪穴式住居は、平面が一辺5m前後あり、壁際に煮炊き用のカマドをもつものが標準タイプである。出土遺物には、日常用の土器のほか、朝鮮半島製の陶質土器や海岸部から運ばれた製塩土器などの珍しいものもみられる。



- ▼古墳時代の容器 ▼方形竪穴式住居跡
- ▼糸をよるための碧玉製のはずみ車



くるすの 栗栖野窯跡 (京都市埋蔵文化財研究所)

9世紀
京都市左京区

はじめてみつかった国内産^{さんさい}三彩陶器の窯跡

栗栖野瓦窯群は、同じ洛北にあった小野^{おの}瓦窯とともに、平安宮の宮殿の屋根を飾る瓦を焼いた窯で、平安時代の法律書「延喜式」^{えんぎしき}にも書かれている。その一部は「栗栖野瓦窯跡」として、1934年に国の史跡に指定された。瓦窯群は史跡指定の範囲外にもおよび、周辺の開発にともなって発掘調査されている。

その瓦窯群の一角から、日本ではじめて二彩、三彩陶器を焼いた窯跡がみつかった。窯は斜面を利用した^{あながま}窖窯で、焚き口や煙道の一部が削られていたが、現在の長さ4.8m、幅1.5mあった。窯は上下2面で焼いた面がみつきり、下層で二彩、三彩陶器を、上層で須恵器が焼かれていた。

- ▼ 5つの口を付けた二彩陶器の壺の小注口部分
完形の五口壺は城陽市久世^{くせ}魔寺の緑釉陶器
- ▼ 二彩、三彩陶器を焼いた窖窯

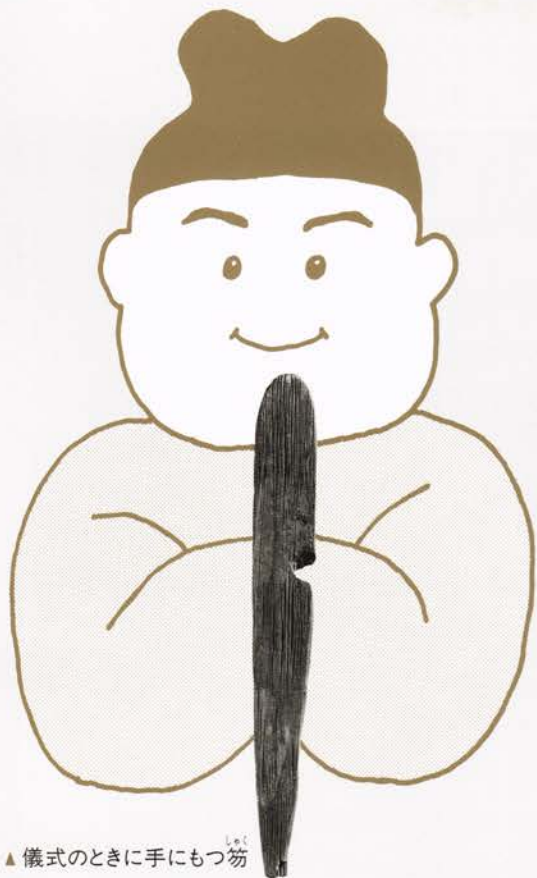


1,000回を超える発掘調査によって多彩な成果

今年、桓武天皇が平安遷都の準備のために、長岡宮の内裏から東院に移ってちょうど1,200年目にあたる。発掘調査の回数も1955年の第1回目の発掘調査から数えて、1,000回を超える。昨年の調査では、宮内では内裏の南側の石敷広場に小さい礎石を並べた建物跡が、左京地域では二条大路が従来の推定場所の2町分北側でみつき、右京地域では鉄製品をつくった工房や建物に覆われた石敷遺構等多彩な遺構がみつかった。出土遺物も珍しいものも多く、トイレ遺構からでてきた籬木ちえぎ、東院跡の笏しやく、天秤ばかりにつかわれた3両の重さの分銅、製鉄工房からみつかった車軸などは、とくに珍品である。

- ▲ 内裏南側の石敷広場の中の礎石建物 宮内第275次
- ▲ 二条大路の側溝からみつかった鬼瓦 左京第298次
- ▼ 石敷遺構を覆う建物跡 右京第408次





▲ 儀式のときに手にもつ笏しやく



▲ 古代のトイレトペーパー 籐木ちゆうぎ



▲ 薬の名前「地黄」じおうなどがかかれた壺



▲ 容量をあらわす「二合」とかかれた壺



▲ まじない用の顔がかかれた壺



▲ 天秤ばかりにつかわれた分銅



▲ 車の車輪の鉄製の軸



▲ 糸をつむぐ鉄製の紡錘車ぼうすいしや



縄文時代から中世まで栄えた村

京都と大阪の境にある天王山の麓は、古くから交通路の重要地点として栄えてきた。下植野南遺跡は、ここを通過する名神高速道路の拡幅工事のため発掘調査を行っている。これまでの調査で、縄文時代から中世にかけての各時代の生活跡がみつき、特に古墳時代には大規模な集落が営まれていたことが明らかになってきた。

今回の調査でも、古墳時代の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡をはじめ、多数の流路跡や室町時代頃の土坑などがみつかった。このほか、子供か幼児を埋葬した縄文時代晩期の埋め甕^{かめ}がみつき、この近くに縄文時代晩期の集落跡が眠っている可能性もでてきた。

- ◀ 調査地と名神高速道路
- ▼ むしろを敷いた住居跡
- ▲ 埋葬用につかわれた縄文土器の深鉢



うちさとほっちょう

内里八丁遺跡 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

3～9世紀
八幡市内里八丁金属の香炉こうろを模した須恵器

稲株跡が残る弥生水田の発掘で有名になった内里八丁遺跡から、今度は珍しい須恵器が見つかった。奈良時代のもので、二段重ねで使用されたらしく、下段の器は、口径が9.3cm・高さ2.9cmで、上に乗るものは口が少し小さい。用途の謎を解く鍵は、金属で作られた柄付きの香炉にありそうである。ここから、奈良～平安時代の掘立柱建物跡と井戸跡が見つかった。井戸は、一辺1.3m・深さ約2.5m。四隅に角材を立て、縦枠に板材を並べたもので、特に北と東の面は幅1.1mもある大きな一枚板がつかわれていた。立派な井戸や建物跡からみて、役所か寺に関係した施設があったのかもしれない。

- ▶ 縦に板を組んだ井戸跡 ▼ 掘立柱建物の柱跡
- ▲ 手のひらサイズの須恵器の香炉





各地との交流を物語る土器

南山城では、地面より高い所が川底となる天井川がよくみられる。そのひとつ防賀川の堤防の下約2 mの所から、厚い砂の層に覆われて古墳時代初期の溝跡や古墳時代後期の掘立柱建物跡が見つかった。溝には、弥生時代の終わりから古墳時代初めにかけての土器片が多量に埋まっていた。この中には、地元で作られたものと一しょに、となりの大阪府や滋賀県産の甕、遠くは愛知県東海地方で作られた「S」字状の口縁をもつ甕なども混じっていた。人の往来や運搬には、木津川の水運も利用されたであろう。これらの土器は、古墳時代初め頃の南山城地域と他地域との交流を物語る貴重な資料である。

◀ 多量の土器が見つかった溝

▼ 地元の土器と各地から運ばれた土器



あらさか
荒坂遺跡 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

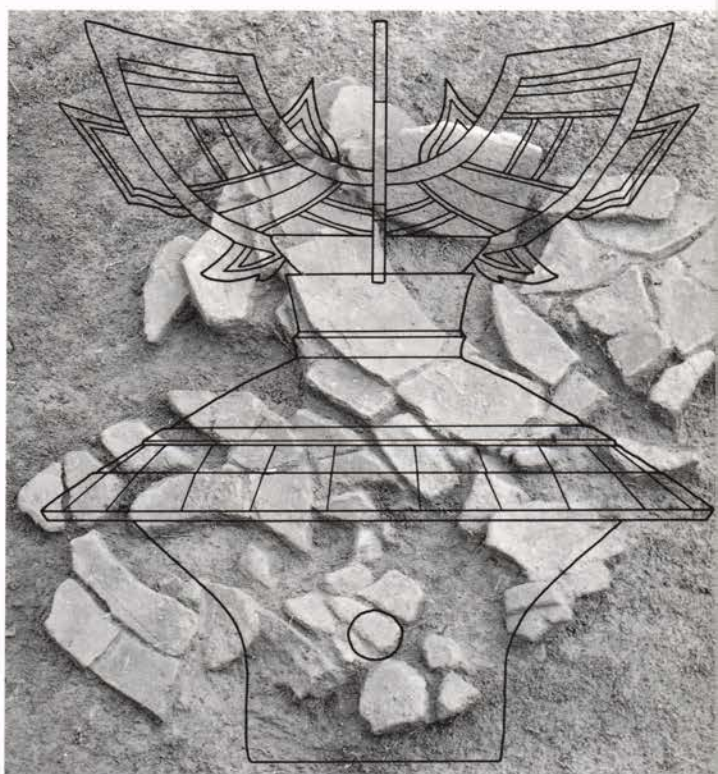
4世紀
 みのやま
 八幡市美濃山

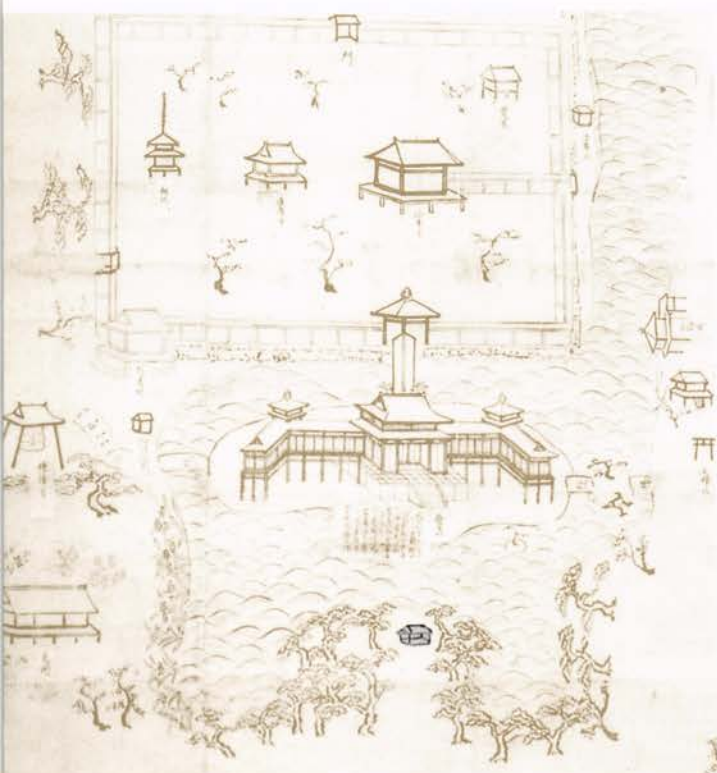
日本最古級のきぬがさ蓋形埴輪

竹ヤブのうっそうとしげる八幡丘陵を越え大阪の北河内に通じる古道脇から、古墳と掘立柱建物跡が見つかった。古墳は、ヤブの土入れで削られ、その存在すら全くわからなかったが、調査の結果、まわりに堀をめぐるしだ一辺20mの方墳であることが判明した。堀の底から、もとは墳丘上に立て並べられてあった埴輪類がまともに出てきた。このうち蓋形埴輪は、その特徴から、4世紀末から5世紀初め頃の、全国的にも珍しい最古級タイプのものとわかった。

この古墳の周辺からは、時期不明の大きな掘立柱建物跡や倉庫跡が見つかっており、豪族の館か役所に関するものとみられる。

- ▶ きぬがさ形埴輪(復原図)と出土状態
- ▼ 大型の掘立柱建物跡





鳳凰堂正面の小御所の建物跡

栄華を誇った藤原氏が、極楽浄土をこの世に再現した建物として著名な、平等院鳳凰堂のまわりの庭園の発掘調査が継続して行われている。1・2年目の発掘調査では、鳳凰堂が中島に浮かぶ浮き御堂的な建物であることがわかり、3年目の昨年には、鳳凰堂を正面から礼拝する小御所の跡がみつかった。

鳳凰堂の正面对岸の汀に近いところで、南北3間(7m)以上、東西2間(4m)以上の規模の、礎石建物の西北辺の一部がみつかった。これが、「中右記」などの平安時代の貴族の記録にあらわれる小御所の跡と推定された。下層からは飛鳥時代の遺構や白鳳時代の瓦なども出土した。

- ◀ 古図に描かれた鳳凰堂と小御所跡
- ▲ 小御所につかわれた河内産の軒瓦
- ▼ 小御所の建物の礎石と鳳凰堂



光明山寺跡 (山城町教育委員会)

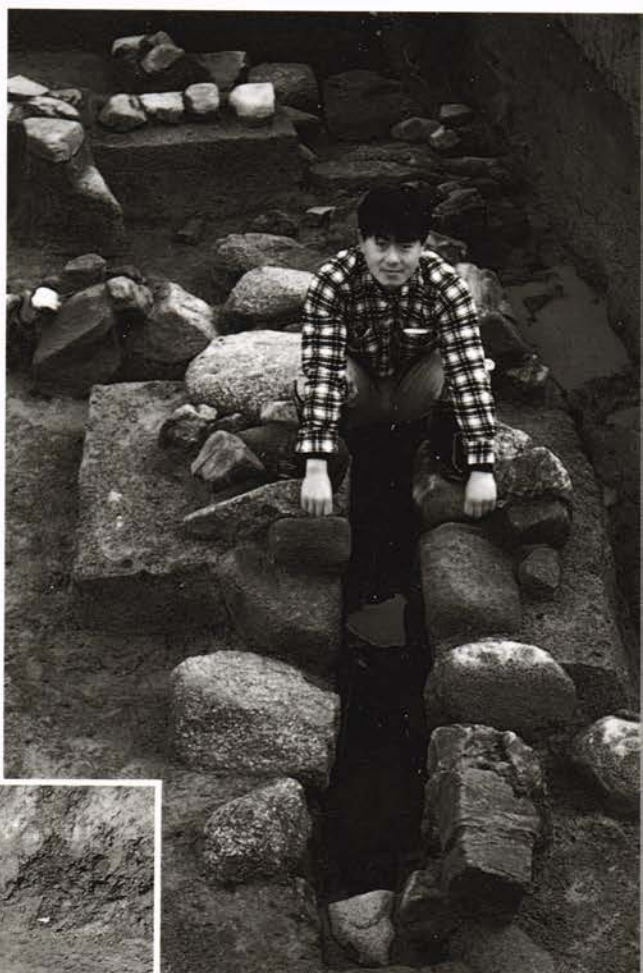
12~16世紀
山城町綺田

姿をあらわした幻の山岳寺院

国宝の釈迦如来像で著名な蟹満寺の東方山中にあった光明山寺は、古代~中世に東大寺の別所として栄えた大規模な寺院であったが、その実態はよくわからなかった。昨年の発掘調査で谷間に残された山岳寺院の遺構が良好な状況でみつかった。それは、多数の坊院が軒を並べていた一画で、寺院の中枢に向かうメインストリートに面して立つ土塀と、そこに開く門跡、塀の内側に接してつくられた石組の遺構などである。石組遺構は谷川に流れる溝につながっており、谷水を引いて流す水洗便所と考えられた。鎌倉時代の年号や東大寺と刻んだ瓦も出土しており、東大寺との密接な関係も改めて証明した。

▼ 門跡の礎石、石段と土塀基礎の石列

▲ 「建長元年東大寺三面僧房」と書かれた軒丸瓦



▲ 土塀の内側につくられた水洗便所





木津川を望む高地性集落

現在、木津高校のある小高い岡は、古代から人が住むのに格好の場所であったと思われる。

校舎の建て替えごとに発掘調査が行われ、住居や古墳の跡が見つかったが、昨年の調査でも、弥生時代後期の竪穴式住居跡3基と、弥生時代や古墳時代中頃の墓のまわりにめぐらした溝と土壇墓どこうぼが見つかった。竪穴式住居跡は、平面が隅丸の方形で、床面の広さは平均畳20帖ほど。それぞれ、外側へ雨水をだすための排水溝をもっている。住居の一つには、多数の土器が床面に残っていた。木津川を見下ろす立地からみて、見張り台の役割もかねた高地性集落のひとつと考えられる。

- ▼物を供える容器
- ◀弥生時代の竪穴式住居跡
- ▼排水溝をもつ隅丸方形の竪穴式住居跡



にしやま

西山遺跡 (京都府埋蔵文化財調査研究センター)

5世紀
いちさか
木津町市坂

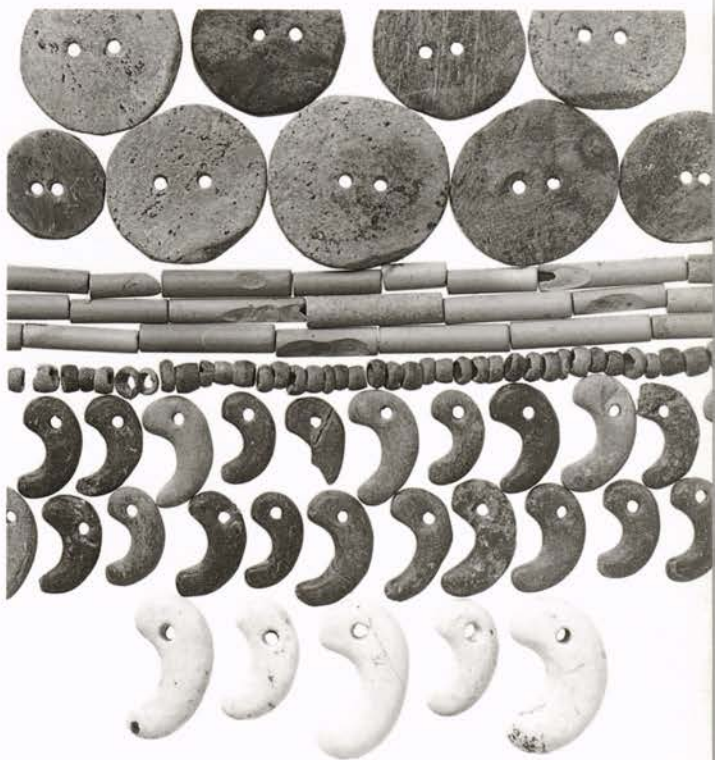
古墳の溝から祭りの道具

木津町の市坂から西側に広がる丘陵地は、西山と呼ばれている。この西山丘陵の遺跡から、2基の方墳と奈良時代の掘立柱建物跡1棟がみつかった。古墳は周溝の一部がわずかに残るのみであるが、陸橋部という溝内の高まった部分のそばから、朱色に染まった土に混じって、滑石とガラスの勾玉・白玉、碧玉製管玉、鏡を模した有孔円板などの石製品が140点余り散乱してみつかった。出土状態からみて、もとはいくつかのグループ毎に糸で結ばれていたらしい。滑石で作られた玉類は、木の枝などに掛けて祭りにつかわれることが多く、これらも、埋葬に伴う儀式や祭りに係わるものと思われる。

▶ 石製の模造品と玉類

▲ 玉類の出土状態

▼ 祭りの跡がみつかった古墳の溝





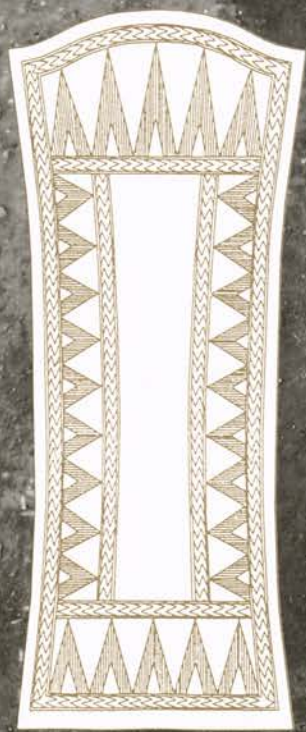
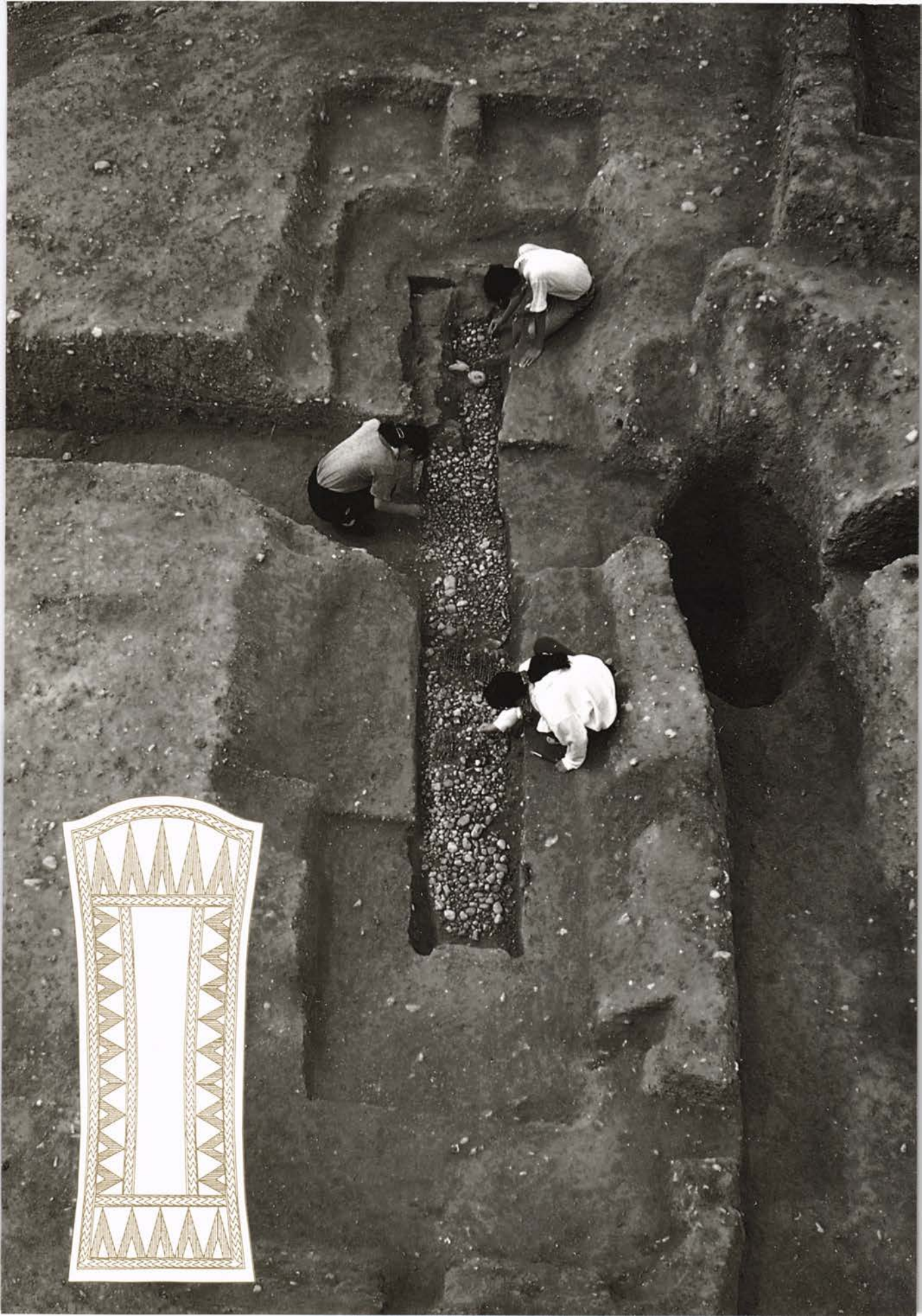
うるし塗りの盾をもつ中規模円墳

木津の平野を見下ろす丘陵上にあるお椀をひっくり返したような直径約26m円墳で、周囲に幅5mの堀をめぐらし、二段に築かれた墳丘に埴輪列や葺石をもつ典型的な中期型古墳である。

発掘の結果、3基の木棺跡が重なって見つかった。最初の埋葬は長さ5.2m、幅80cm前後の組合式箱形木棺で、底に小礫を敷き、内部は板で3つに仕切られていた。遺骸は中央の室に北枕で葬られ、約20本を束にした鉄のヤジリや矢筒、刀剣、堅櫛、白玉などが副葬されていた。棺の上や外側には鉄鉾や黒うるし塗りの革盾がおかれていた。棺の構造や埋葬方法は、類例に乏しく、この古墳の築造者の独自性を物語る。

- ◀ 空からみた古墳 ▼ 墳丘のまわりに飾られた埴輪
- ▶ 古墳の主を埋葬した木棺跡と革製の盾







瓦谷古墳は前方後円墳だった

1990年の発掘調査で、鏡や甲冑など数々の副葬品が見つかった瓦谷古墳の背後の台地上から、方墳6基と円墳1基のほか、25基の埴輪棺、さらに奈良時代の墓や中世の環濠跡などが見つかった。そのうえ、これまで円墳とみられていた瓦谷古墳(1号墳)が、実は、全長48mの前方後円墳であることがわかった。

1号墳のそばからみつかった方墳群は、周溝がかろうじて残るのみで、一辺10m前後の小型のタイプが多い。埴輪棺は、これらの古墳によりそう格好で埋められていた。2~3個の円筒埴輪を組み合わせて棺に利用し、つなぎ目や両

◀ 復原中の盾形の埴輪棺

▲ 盾形埴輪棺の出土のようす

▼ 円筒埴輪を転用した埴輪棺



端は、蓋形や盾形埴輪の破片でふさいでいた。
古墳群と埴輪棺に使用された埴輪の年代は4世紀後半頃で、瓦谷1号墳築造のあと、あまり期間をあげずに造られていったらしい。

1号墳に葬られた人物は、大和の王と関係が深い権力者と考えられており、そのまわりに築かれた方(円)墳群は、その家来か親族の墓、埴輪棺は、そのまた家来の墓と考えられる。このようにひとつの古墳群内で、外形や埋葬の方法から、埋められた人の身分のランクがわかる例は、全国的にも少なく珍しい。

▶ 前方後円墳の瓦谷1号墳

▼ まわりの溝から埴輪のみつかった方墳



く に きゅう 恭仁宮跡 (京都府教育委員会)

6,000年前・8世紀
加茂町岡崎ほか

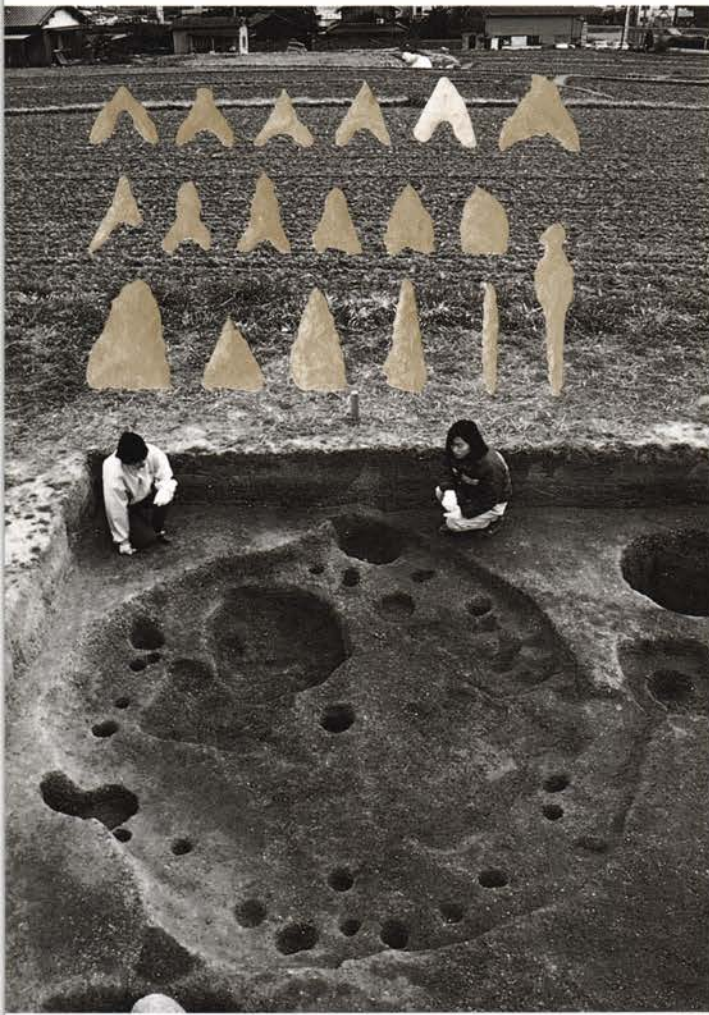
恭仁宮の東面南門と縄文時代の住居跡と

奈良時代に3年余営まれた短命の都、恭仁宮跡の大きさはまだわかっていない。南の端を限る築地について、一昨年の調査で東の端を限る築地状の遺構がみつかった、ようやくその見通しがたってきた。昨年の調査では、南東角から北方185mのところ、ついに東面する3つの門のうち、南側の門跡がみつかった。門跡の遺構は、東西2間、南北3間の八脚門やつあしもんと呼ばれる形式の門であった。恭仁宮の下層では、縄文時代前期の住居跡や土坑群がみつかった。住居跡などから、縄文土器と多量の石鏃・石錐などの打製石器と石器の材料の破片、石器加工用の礫がみつき、石器をつくった住居跡と推定された。

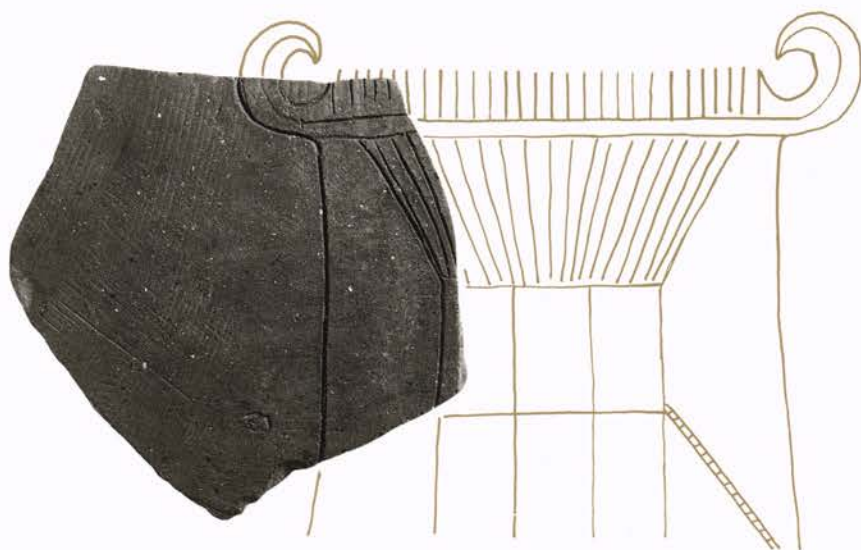
▼石のやじりと石のきり

◀たくさんの石器や土器がみつかった縄文人の住居跡

▼恭仁宮の東側に開いた門の柱跡



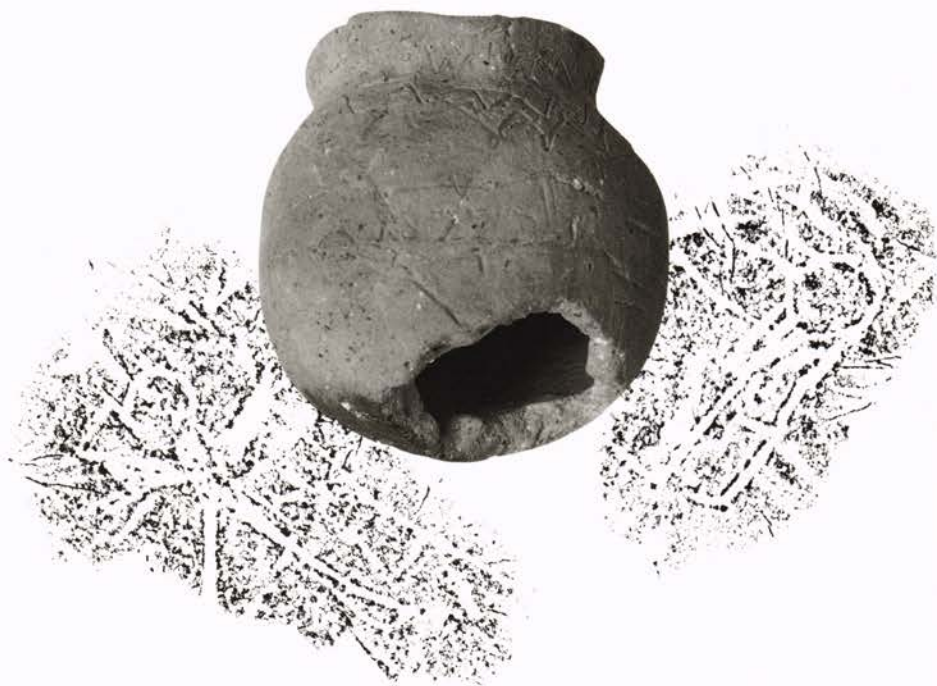
描かれた古代



ろうかく
 ◀ 楼閣建物が描かれた弥生土器片
（京都市烏丸綾小路遺跡） 1世紀



ひとがた
 ◀ 仏画風の顔が描かれた人形
（向日市長岡京跡左京第290次） 8世紀



▲ 二人の人物が描かれた土師器の小壺
（大宮町有明古墳群） 5世紀

その他注目の遺跡



いもだに ◀ 芋谷遺跡 (大宮町)

遠所遺跡群の発掘で、丹後半島の製鉄遺跡がクローズアップされてきたが、昨年、芋谷遺跡から非常に残りのよい、奈良時代前半期の製鉄炉跡が1基みつかった。炉跡は、長方形箱型で長さ約2.7m・幅約1.3mの規模をもつ。長辺の両サイドに、炉心を保護する花崗岩の石材が下部を埋め込んで立て並べられ、内部には湿気を防ぐため炭の粉が厚く敷かれていた。

しんくうだに ▶ 神宮谷3号墳 (綾部市)

綾部市北東の山間部にある古墳時代後期の神宮谷古墳群の1基から、埋葬場所のリフォームとも呼べる全国的にも珍しい横穴式石室がみつかった。石室の全長6.4m、^{げんしつ}玄室長3.6m、同幅1.8mで、玄室内を仕切るように中央に石の壁を築き、その片方の空間を追葬時に再び利用していた。6世紀末頃の築造で、改修理由はもとの壁の崩れや石室小型化の影響が考えられる。



あまわか ◀ 天若遺跡 (日吉町)

丹波地方は昔からイノシシ猟の盛んな所であるが、山間部にある天若遺跡から、ケモノの追い込み狩猟につかわれた縄文時代後期の落とし穴が23基みつかった。直径1m前後の円または^{だえん}楕円形で、深さは約1.5m。底には、獲物を突き刺す先の尖った杭を立てた穴がある。類例は、関東・東北・九州地方に多いが、近畿地方では、あまりみつかっていない。

みさかじんじゃ
▶ 三坂神社墳墓群(大宮町)

弥生時代後期初頭(2世紀)に築かれた三坂神社墳墓群の3号墓から、大規模な木棺墓が見つかった。死者の頭付近には真っ赤な朱がひろがり、中国製とみられる素環頭そかんとう鉄刀てつた1振りのほか、鉄のヤジリ、ヤリガンナ、うるし塗りの杖、それにガラスの勾玉・小玉・管玉、水晶製小玉など豊富な副葬品をもつ。墓の主は、各地との交流で栄えたこの地域の王であろうか。



じゅわんないん
◀ 淳和院跡(京都市)

阪急西院さいいん駅の近くから、地名の由来となった平安時代前期の淳和天皇の離宮、淳和院跡の一部が見つかった。もとは南池院なんちいん(西院)と呼ばれ、王朝人が宴を楽しんだ場所としても知られている。調査地はその西南角にあたり、三時期にわたる大規模な掘立柱建物跡4棟が見つかった。巨大な柱穴には柱根の一部がのこるものもあり、貴族が身につけていた飾り金具などが出土した。

展示品リスト

遺跡名	遺物名	点数	時代	保管者
里ヶ谷横穴群	須恵器・土師器	15	6～8世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	金環	2	〃	〃
左坂横穴群	須恵器	1	8世紀	京都府教育委員会
	あわび殻	1	10世紀	〃
奈具岡・奈具谷遺跡	弥生土器	6	1世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	石ノコ・石針・管玉・砥石	一括	〃	〃
	有孔円盤状石製品	1	〃	〃
	勾玉	2	〃	〃
	箕	1	〃	〃
	有舌尖頭器	1	1万年前	〃
左坂墳墓群	弥生土器	1	2世紀	京都府教育委員会
	ガラス製小玉	6連	〃	〃
有明古墳群	線刻土師器壺	1	5世紀	大宮町教育委員会
定山遺跡	須恵器・土師器	4	6世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	手づくね土器	4	〃	〃
	有孔円板	1	〃	〃
	滑石製勾玉・土製勾玉	2	〃	〃
	砥石	2	〃	〃
	銅椀・鉄器類	4	6～12世紀	〃
	布目瓦片	2	8世紀	〃
	軒丸瓦・軒平瓦	4	17世紀	舞鶴市教育委員会
田辺城跡	寛永通宝	1	〃	〃
	鉄砲玉	3	〃	〃
	鉄鍬・鉄剣・斧・ノミほか	39	〃	〃
カヤガ谷古墳群	須恵器	4	5世紀	福知山市教育委員会
	鉄鍬・鉄剣・斧・ノミほか	39	〃	〃
	須恵器・土師器	2	12～13世紀	〃
上ヶ市遺跡	瓦器	4	〃	〃
	青磁・白磁片ほか	6	〃	〃
	須恵器・土師器	7	6世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
細谷古墳群	金環	4	〃	〃
	象嵌刀鐔	1	〃	京都府教育委員会
細谷4号墳	馬具	1	〃	〃
	天目茶碗	1	16世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
八木城跡	青磁	1	〃	〃
	土師皿	3	〃	〃
	碁石	3	〃	〃
	石臼	1	〃	〃
	銭貨	2	〃	〃
	青銅鱗口片	1	14～15世紀	〃
	黒曜石製尖頭器	1	1万年前	〃
鹿谷遺跡	須恵器・土師器	8	5～6世紀	〃
	製塩土器片	3	5世紀	〃
	陶質土器片	2	〃	〃
	紡錘車	1	〃	〃
	砥石	2	〃	〃

遺跡名	遺物名	点数	時代	保管者
栗栖野窯跡	二彩・三彩陶器	2	9世紀	京都市考古資料館
	焼き台・「玉」銘平瓦	6	"	"
	のし瓦	1	"	"
	トチン	16	"	"
烏丸綾小路遺跡	線刻弥生土器	1	1世紀	"
長岡京跡左京第270次	簀(ちゆう)木	5	8世紀	向日市埋蔵文化財センター
第287次	笏(しゃく)	1	"	"
第290次	人形	1	"	"
	墨書土器	1	"	"
第300次	鬼瓦・磚	3	"	"
第295次	分銅	1	"	長岡京市教育委員会
第297次	墨書土器	5	"	"
	墨書人面土器	4	"	"
	帯金具・和同開珎	2	"	"
右京第400次	フイゴ羽口	1	"	"
	車軸	1	"	"
	炭	一括	"	"
第408次	鉄製紡錘車	1	"	"
下植野南遺跡	縄文土器	2	2,5千年前	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	弥生土器	2	1世紀	"
	石庖丁	1	"	"
	円筒埴輪	1	5世紀	"
	須恵器	2	5～9世紀	"
	軒丸瓦	1	8世紀	"
内里八丁遺跡	土師器	7	3～13世紀	"
	須恵器	4	8世紀	"
	黒色土器	1	9世紀	"
	緑釉陶器	1	"	"
	土鈴	1	8世紀	"
大切遺跡	土師器	10	3世紀	"
	脚状土製品	1	"	"
荒坂遺跡	蓋形埴輪	1	4世紀	"
平等院	軒丸瓦・軒平瓦	5	7～12世紀	平等院・宇治市教育委員会
	須恵器	1	7世紀	"
光明山寺跡	軒丸瓦・軒平瓦	7	12～14世紀	山城町教育委員会
	文字瓦	1	"	"
	瓦器椀	1	"	"
	土師器羽釜	1	"	"
	温石(おんじゃく)	1	"	"
燈籠寺遺跡	弥生土器	3	2世紀	京都府埋蔵文化財調査研究センター
	須恵器・土師器	7	5世紀	"
西山遺跡	玉類・石製模造品	一括	"	"
西山塚古墳	鉄鏃・鉄矛・石突	12	"	"
	玉類	1連	"	"
	円筒・朝顔形・鶏形埴輪	5	"	"
	土師器	1	"	"
瓦谷古墳群	埴輪棺	2	4世紀	"
	家形・盾形埴輪	2	"	"
恭仁宮跡	縄文土器	2	6千年前	京都府教育委員会
	石鏃・石錐・叩き石	30	"	"



第11回 小さな展覧会 京都発掘'93 発行日/1993年8月14日

編集・発行/財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 ☎075-933-3877 印刷/南真陽社

主催 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援 京都府教育委員会 協賛 向日市文化資料館